



南部町立南部中学校 学校だより 第11号

# チーム南部中

令和3年9月29日(水)

校長 望月和彦

## 第11回輝城祭～新たな足跡～

9月17日(金)に第11回輝城祭を開催しました。感染症拡大のため開催を6日延期し、保護者や地域の方々などの参観はなし、さらには台風接近のため、当日の朝の判断で文化の部と体育の部の順番を入れ替えるという今までにない形での開催となりました。

オープニングでは、3年生によるソーラン節の発表がありました。「コロナ禍の中でどうすればソーラン節ができるのか」を考え、初めてのウッドデッキの演技です。体育館からの移動があったり、スポットラ



イトが使えなかったり、「体育館の中より声は響かないのでは」「一体感に欠けるのでは」など、様々な不安もありました。しかし当日は、体育館内とは違い、ウッドデッキのひな壇から見る事ができたので、3年生一人一人の表情、足の動き、指先まで細かく見る事ができ、全員の声が体育館と校舎に反響しとても迫力がありました。細部にこだわり、気持ちを一つにしようと、どれだけ一生懸命取り組んできたかがわかる「庄巻」の演技でした。私は開祭式のあいさつの中で、正面に座る3年生の顔とソーラン節での全力を尽くそうとする姿が重なり、ことばにつまってしまいました。それほど素晴らしい演技でした。

開祭式後には、全校制作の発表、学級旗と展示装飾の紹介、ポスターコンクールの表彰が行われました。全校制作部門が中心になって取り組んだ今年度の作品は、コロナ禍に苦しむ人々のために「疫病退散」の意味を持つ「アマビエ」です。牛乳びんのふたや使用済みCDなどを使って、全校生徒のメッセージとともに4枚の「アマビエ」を制作しました。制作した作品のうち3枚は、町内の医療・福祉施設に届ける計画になっています。各学級の6枚の学級旗は、それぞれの学級の願いや輝城祭にかける思いがこもった図案になっていて、学級のシンボルとしてふさわしい作品になりました。



また、体育館内には、展示装飾部門

が中心になって、工夫を凝らした飾り付けが行われ、全校生徒の顔写真とテーマ「つながり」にちなんだ掲示物や美術文芸部の作品などがきれいに展示され、会場の雰囲気盛り上げていました。広報部門は、広報紙やプログラムを作成し、取り組みの様子や当日の内容を紹介したり、ポスターコンクールの表彰や幕間のPR動画を担当したりして、縁の下の力持ちとなりました。



「体育の部」は9時半過ぎから校庭に移動し行われました。例年より1週間ほど遅い開催で午前中になったため、それほど暑くなく、絶好のコンディションのもとで競技が行われました。今年度は縦割り系列の競技も取り入れ、「8の字跳び」「棒取り」「縦割りリレー」

「台風の日」「背中渡り」の5種目を行いました。感染症対策の細かなルールを設けたり、競技中以外はマスクを着用したり様々な制限の中でしたが、学級ごと、赤白の系列ごと、心を一つにして熱戦を繰り広げました。生徒たちのあふれ出すエネルギーを目の当たりにして、学校教育の中でのこうした行事の重要性を強く感じました。種目選び、ルールづくり、当日の競技の進行



や運営に体育部門の生徒たちが活躍しました。競技の総合結果は、クラス対抗では3Aが、系列では白組が優勝しました。

体育の部が終了すると、再び生徒たちは体育館へ。午前最後は美術文芸部の発表です。美術文芸部では輝城祭に向けて巨大絵の制作に取り組みました。体育館西側に用意された作品が披露され、代表者によって紹介されました。巨大絵の中央には校舎、その周りには部員それぞれがテーマ「つながり」をイメージした絵が描かれた素敵な作品でした。



給食後は各学年の演劇です。雨が予想されていたので3年生がトップバッターになりました。演目は「うさみくんちのお姉ちゃん」。気の弱い男子高校生の溝呂木くんが、友だちの宇佐美くんのお姉さんとのやりとりの中で、一緒にアンパンマンマーチを歌い、次第に勇気を持っていくストーリーです。コメディタッチのストーリーの中には愛と勇気の大切さが盛り込まれており、一人一人の登場人物の役柄を3年生がしっかり捉えて見事に演じていました。さすが3年生。トップバッターとして1・2年生に良い刺激を与えてくれました。



2年生の演目は「イマジン」。ジョンレノンの平和を祈る歌をテーマに、学校生活の中で起きた差別やいじめに対して、生徒たちが何を考えどう行動したかを、アメリカ同時多発テロと結びつけて、描いた作品です。本来ならみんなで「Imagine all the people living life in peace」と合唱を響かせたかったことなのでしょうが、事前に録音した合唱を流すなどコロナ対策を考えて工夫が見られました。英語の台詞も堂々とこなし、揺れ動く中学生の気持ちを丁寧に表現しようと努力の成果が表れていました。



演劇の最後は1年生。演目は「お〜い」。山奥村に突然現れた大きな穴。山奥村ではこの穴をゴミ処分場にして町を豊かにしようとしています。老婆が危険を警告し反対する人たちも現れますが、その間にたくさんのゴミが持ち込まれ、放射性廃棄物までも…。環境問題を考えるテーマに1年生が取り組みました。劇の中ではコロナ対策や全員が出演するために“当てレコ”（役者の演技に合わせて声役の生徒がマイク

クで台詞をしゃべる方法）を取り入れたり、クラシックバレエ、体操、ダンスなどを習っている生徒の特技を劇に取り入れたり、とても工夫された1年生らしい発表でした。

文化の部の最後は、吹奏楽部のステージです。吹奏楽コンクールで発表した「槿の花」や今流行の「青と夏」「カイト」など曲を中心に素敵な演奏を聴かせてくれました。3年生はこれで引退になります。3年間の部活動への感謝の気持ちと後輩たちへの期待が込められた演奏でした。文化部門の生徒たちの努力と臨機応変な対応により、文化の部も温かい雰囲気の中でほぼ予定通りに終了しました。



閉祭式では、これまでの取り組みと当日の様子をスライドで見ながら、7人の部門長、6人の学級代表の生徒が輝城祭全体を振り返り、感想を発表しました。閉祭式に臨む全校生徒一人一人の表情には、大きな達成感と満足感が感じられ、佐野遥斗生徒会長の閉祭宣言で幕を閉じました。生徒たちは、コロナによる夏休み後半の取り組み中止、開催日の延期、無観客での開催、そして台風による日程変更という困難な状況にも、下を向かず、できることを考え、支えてくれる方々に感謝の気持ちを持ちながら、テーマ「つながり」を意識して精一杯取り組みました。取り組みの過程と当日の発表の中で、生徒たちは個の力や集団の力を確実に高めることができました。南部中の歴史に確かな足跡を残し、そこで得た力はこれからの生活に活かされていこうと思います。

